

6. 5 とむらうアンケート抄

Facebook「とある民俗学講師の補足メモ」

- ・長いプロセス：通夜、葬式、出棺、埋葬／位牌・仏壇、月命日、彼岸、盆、年忌供養、弔い上げ…
- ・葬送の前代：コミュニティに支えられた葬式仏教が基調（神葬祭は近代から）
- ・葬送の近現代：高度成長期（葬送の脱コミュニティ化）とバブル期以後（主体と手法の多様化）→「終活」の時代

【死の直後の作法】2022年4月、京都府相楽郡和束町に住んでいた祖父が亡くなったとき次の日から近所の人が家へかわるがわる弔いの挨拶に来た。次の日のお昼ごろに葬儀屋が到着すると、祖父を安置していた部屋に水槽を設置して外の水道からホースをひき祖父の体を洗ってくれる湯灌をしてくれた。親戚一同で柄杓で足元から頭のほうにお湯をかけた。そのあと祖父が生前着ていたオーダーメイドスーツを祖母が用意し、着せてもらった状態で棺にいれてもらった。

【葬儀の準備】私の母の実家は兵庫県豊岡市で、20年前、母の兄がなくなった時は自宅で葬儀をしました。亡くなってすぐ、地域の隣保会の人達が家に来て、その中で「葬儀委員長」と「台所長」を決める、隣保会で受け継いだノートがあるらしく、葬儀の手続きと料理のレシピ・量が詳細に書かれていて、それに基づいて円滑に準備が進められるそうです。台所には十数人の割烹着を着た女性が入りお坊さん・遺族・参列者の食事を用意し、役所の手続きも近所の人がぬかりなくするので、出棺までの間は遺族は何もせずにすむそうです。通夜の夜は一晩中獣や悪霊の番のために喪主が遺骸に寄り添い、遺体にはお守りとして刃の出た刀を持たせます。また、故人の食器をすべて集めて出棺の際に割るそうで、故人が帰って来ないようにするためとか。火葬場へ行くときは極楽浄土にちなんで西向きに出て、帰りは違う道をとるそうです。その後、初七日からお逮夜ごとに四十九日までは毎週隣保の人が来て詠歌と宴会が家で行われます。

【通夜】2018年7月、岡山県岡山市にて曾祖父の葬式が行われた。前日に行われたお通夜の後に「寝ずの番」を親族の一員として私自身も担った。寝ずの番とは、故人があの世界に行く途中で道に迷わないで天国まで無事行けるように、葬式まで線香を絶やさないという習わしだと祖母から聞いた。お通夜の夜から翌朝まで、親族で交代して線香をつないだ。

【出棺】2013年11月、母方の祖母の葬式をした時、棺の周りを三周して、代表者が祖母の使用していたお皿を割ってから火葬場へ向かったことを覚えています。方向感覚を鈍らせ、故人が間違えてこちらの世界に戻ってこないようにする意味合いがあるそうです。当時はこの儀式をすることで、祖母が家にも帰って来れなくなるのかと悲しい気持ちがありました。が、今振り返ると感謝の気持ちや、ゆっくり休んでねという意味合いも込められているのではないかと思います。

【土葬】2010年、三重県伊賀市猪田にて、父方の曾祖父のお葬式を執り行った。このお葬式が強烈に印象に残っているのは、その葬法ゆえである。多くの方々が火葬される現在、私の曾祖父は土葬された。土葬するとき私の父を含め、一族の若手衆が礼服を土で汚しながら埋葬する姿が、強烈な記憶として今も私の中に刻まれています。

【葬礼品】昨年、曾祖母のお通夜、四十九日に参列した。お通夜は富山県氷見市内のセレモニーホールで、四十九日は同市内のお寺で行われた。いずれも近親者だけの簡素的なもの。氷見市ではどら焼きを配る習慣があるらしく、私の家族は5人家族で40個以上もらった。以前祖父が日時を間違え、百個以上のどら焼きを注文してしまい、もらったこともある。

【四十九日まで】2022年、兵庫県淡路市岩屋に住んでいた祖父が亡くなった際、35日の法要の一環で「おむすびころがし」を行った。両親と開鏡山という山に登り、中腹の崖から、崖に背を向けた状態で後ろ向きに大きめのおむすびを投げた。その際、決して振り返ってはいけないようだ。付近にあった看板によると、あの世に行く入り口の門前に鬼がおり、死者が通ることができないので、坂の上からおむすびを投げることで鬼の気を引き、死者が成仏できるようにするのだという。自分がした時には両親など数人で行ったが、祖母の話によるとコロナ禍以前では大勢の親族が同行したようだ。

【仏壇】兄が2021年7月13日に亡くなってから、毎朝お仏壇にご挨拶をしている。宗派は曹洞宗で、松雲寺（静岡市駿河区向敷地）にお世話になっている。起きたらすぐに、炊いたご飯と、きれいなお水をお仏壇にお供えする。その後、家族全員で、①2分間ほど座禅を組み、心を落ち着かせる、②ろうそくに火を灯し、お線香をたてる、③リン（チーンとなるやつ）を三度ならして礼拝、④訶般若波蜜多心經→舍利礼文の順番にお経を読む、⑤もう一回リンを三度ならして礼拝、といったことをする。曹洞宗では、こういった毎日の挨拶や、お墓参りよりも、仏（亡き人）をがっかりさせないような日常生活こそが、最大の供養と言われる。葬儀で、骨をはしでつかんだときの、あまりに骨が軽かったことを思い出す度、涙を流さずにいられない。しかし、亡き兄が見守っていることを信じて、今この瞬間を頑張るようにしている。

【墓参】私の実家は高知県南国市にあり、毎年彼岸にはお墓参りをする。お供えするのはお米と市販のお菓子、家に生えている榊で、余裕があれば花もお供えする。祖父方の墓は二か所にあり、集落の中で古いところがいっぱいになったので、新しい場所を作ったものと思われる。石塔が建てられているものが大半だが、曾祖父母の墓だけ、石が積まれて植物を備える用の竹筒が地面に刺されているだけで、小さいころからどうしてほかのお墓とは形がちがうのか不思議に思っていた。古いほうの墓地にも似たような墓があるので、石塔よりも古い形なのかもしれない。墓地は集落の人たちで管理し、草刈りなどを手伝ったりしている。近年、子供が家を出たりして墓の管理が難しくなり、代々の先祖たちの墓を掘り起こして、少量の骨だけ取り出し、「〇〇家先祖代々の墓」のようにまとめ、残りは散骨する人が増えている。祖母も、後継ぎもないので、かなりのお金をかけて数年前に実家の墓をこの形に変えた。

【お盆】地元の愛知県豊橋市では、お盆の初日である8月13日夕方にはお墓参りし、家で迎え火を焚いた。祖母は「おしょうろうさまをお迎えにいくよ」と言い、「おしょうろうさまって何？」と私が聞くと、ご先祖様の霊のことだと教えてくれた。13日夕方には盆提灯にあかりを灯し、祖母と迎え団子を作って、仏壇の前にまこもを敷いて水と一緒ににお供えした。お盆の3日間は朝・昼・晩と毎食、御霊供膳を用意した。14日にはおっさま（和尚様）を家に招き法要。15日の晩には、おたちのおかゆをお供えし、家で送り火を焚いてからお墓参りに行った。お墓の前にまこもを敷き、送り団子を蓮の葉でくるんだものをナスで作った牛に乗せ、お供えした。父の初盆には、叔母がお施餓鬼の時に米が入った長方形の布袋をお供えした。祖母曰く、故人が女性の場合、三角の袋を使い、袋の上に草履や扇子をしばってお供えするとのこと。

【盆踊り】私の母方の祖父母は山口県の杵島に住んでいて、昔からお盆の時期になると帰省していた。お墓参りを兼ねていたのだが、子どもの頃楽しみだったのは島中の人が集まって行っく盆踊りだった。盆踊り自体というよりも、盆踊りに参加するとお菓子や缶ジュースがもらえたことが大きい。その年が初盆の人の家族が、お菓子やジュース、お酒を配るという風習だと母に教えてもらった。櫓の正面には亡くなった方々の写真が置かれていたのを覚えている。島の人々はつながりが強いため、みんなで初盆の人を盆踊りによって供養し、そのお礼として家族がお菓子などを配っているのだろう。

【新しい葬儀】2024年8月25日、地元兵庫県加古川市で、長くお世話になっていて家族での付き合いもあった美容師さんの葬式に参列した。この式は一般的な厳かな仏教式から大変かけ離れた式で、例えばBGMは美容師さんの意向か一般的なオルゴール調の悲しげな曲ではなく、本人が生前好んで聞いていたジャズの曲であり、お坊さんはおらず読経も行われず、その代わりに司会による美容師さんの人生の振り返りが語られ、奥さんが参列者に涙ながら挨拶した。その後、焼香と出棺前の最後の見送りが行われ、皆で花を棺に詰め加えて、美容師さんの好きな曲の楽譜が入れられた。形式ばっていない、その人らしさを詰め込んだ式で、生前の美容師さんを思い出させるらしさが詰まっていたと感じた。

【納骨堂】4月に、数年前に亡くなった親戚のお墓参りに行きました。てっきり所謂墓石が並ぶ墓地に行くのかと思っていたら、着いたのは都内のビル。目黒御廟という納骨堂で、隣にお寺が隣接しているのですが、とても墓地というイメージはありません。受付を過ぎ、少しの手続きをすると、専用ブースに故人の顔写真と「〇〇家」という字が現れるのです。そこでしゃがむこともなくお参りができてしまいます。個人的には風習や伝統が薄れて複雑な思いもありますが、足腰の弱った高齢の遺族にとっては、交通の便が良くバリアフリーのお墓というのは便利なようです。